



京大広報

No. 566

2002 .3



総合人間学部構内発掘調査現地説明会 関連記事本文1213ページ

目次

大学の動き

京都大学環境憲章の制定.....	1208
京都大学環境憲章について.....	1209
平成14年度入学者選抜学力試験の 第1段階選抜状況.....	1211
博士学位授与式.....	1212
「京都大学と近畿地区在日外国公館等との交流会 (Kyoto University Kansai Forum)」の報告 ...	1212
国立大学の改革に関する講演会の開催.....	1213

紹介

総合人間学部構内における 平安時代経塚の発見.....	1213
--------------------------------	------

随想

タイトル? 「停年でやめた人の近況報告」 とでもしておいて。 名誉教授 久保田 競...1215	
--	--

洛書

きみ, 文学部へ何しに行くんや, 小説家にでもなるつもりか? 理系の先生方のための文学部案内 齊藤 泰弘...1216	
--	--

訃報	1218
----------	------

日誌	1220
----------	------

話題

スタンフォード大学とインターネットを 利用した日米共同演習科目の実施.....	1220
京大病院で『新春コンサート』を開催.....	1221

お知らせ

「京都大学教官の著作を読もう! 100選」の開催	1221
-----------------------------------	------

編集後記	1222
------------	------

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

京都大学環境憲章の制定

環境問題が地域社会にとって重要な課題となりつつあることは周知のところであり、京都大学としても教育・研究機関の使命として、教育や研究を通じ、環境問題解決に向けて積極的な取り組みを行う所存であります。

また、大学運営に当たっても、最近定めた「京都大学の基本理念」の中で「京都大学は、環境に配慮し、人権を尊重した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える。」と明記しましたように、自らが引き起こす環境負荷を可能な限り低減することに努めなければなりません。

この基本的な考え方をより明確にするため、環境保全委員会に京都大学の環境憲章の作成をお願いしていましたが、約1年間の議論の結果、このたび京都大学環境憲章の成案を頂き、評議会で決定をいたしましたので、広報に掲載し、広く本学関係者に周知いたします。

本学の構成員一人一人が、この京都大学環境憲章に掲げられた基本理念や基本方針を理解し、環境負荷低減に向けた努力をされることを強く望みます。

平成14年2月13日

総長 長尾 真

京 都 大 学 環 境 憲 章

基 本 理 念

京都大学は、その伝統によって培われた自然への倫理観と高度な学術性や国際的視野を活かし、環境保全のための教育と研究を積極的に推進し、社会の調和ある共存に貢献する。

また、本学は、人類にとって地球環境保全が最重要課題の一つであると認識し、大学活動のすべてにおいて環境に配慮し、大学の社会的責務として環境負荷の低減と環境汚染の防止に努める。

基 本 方 針

1. 環境保全の活動を積極的に進めるため、本学のすべての構成員（教職員、学生、常駐する関連の会社員等）の協力のもと、継続性のある環境マネジメントシステムを確立する。
2. 教育・研究活動において、環境に影響を及ぼす要因とその程度を十分に解析し、評価するとともに、環境保全の向上に努める。
3. 環境関連の法令や協定を遵守することはもとより、可能な限り環境負荷を低減するため、汚染防止、省資源、省エネルギー、廃棄物削減等に積極的に取り組み、地域社会の模範的役割を果たす。
4. 環境マネジメントシステムをより積極的に活用し、地域社会と連携しつつ、本学の構成員が一致して環境保全活動の推進に努める。
5. 本学構成員に環境保全活動を促す教育を充実させるとともに、環境保全に関連する研究を推進し、その成果を社会へ還元する。
6. 本学が教育と研究における国際的拠点であることから、環境保全面での国際協力に積極的な役割を果たす。
7. 環境監査を実施して、環境マネジメントシステムを見直し、環境保全活動の成果を広く公開する。

なお、本環境憲章は、総長の諮問機関である環境保全委員会が検討を重ね成案を作成し、部局長会議での審議を経て、平成14年2月5日開催の評議会に附議され、承認されたものである。

京都大学環境憲章について

京都大学環境保全委員会

1. 環境憲章制定の経緯

京都大学が研究機関として地域環境に様々な形で環境負荷を与えていることを実感し始めたのは、1970年に制定された「水質汚濁防止法」において、化学物質を扱う研究機関が特定事業所として規制対象となった時からである。

当時、本学では実験廃液をどのようにして適正処理すべきかが大きな課題となり、そのため、1972年に全学委員会として廃棄物処理等専門委員会が設置された。この委員会は本学をとりまく様々な環境問題に対応するため、1977年に京都大学環境保全委員会へと変更された。

環境保全委員会は、京都大学の環境問題への基本的な方策を調査審議する委員会であるが、これまでは本学に発生する実験廃棄物の管理方法、排出水の管理体制の整備、アスベスト対策、医療廃棄物処理、廃試薬対策、ダイオキシン対策など様々な環境関連法の整備や強化に伴う、具体的な環境問題への対応に追われてきた。

しかし、1997年頃から環境保全委員会では、本学も主体的に環境問題へ取り組み地球社会へ貢献すべきであるとの議論がなされるようになった。

すなわち、『京大広報』(No.515 1997.7)で紹介したように環境保全委員会は、「京都大学は、自ら率先して環境への影響を把握し、社会に対する責任を全うすべく本学の環境保全へ向けた改善を自主的に進めていくシステムを構築すべきである」との考え方のもとに、下記のような項目について議論が始められた。

- (1)環境問題に対する京都大学の基本姿勢を明確にすること(例えば環境憲章の作成など)
- (2)京都大学の環境評価プログラムの検討(環境管理体制、環境負荷の把握、環境美化対策、環境配慮行動の実施など)
- (3)環境意識の向上方法について(環境教育の充実、環境情報の提供、環境美化運動、広報、啓発)

(2)、(3)については、具体的な検討がなされ、一部実

施に移されたものもあったが⁽¹⁾についてはやや後回しの状態にあった。

おりしも、工学研究科と情報学研究科が桂キャンパスへ移転することになり、そこに環境マネジメントシステムを導入することが検討されることとなったため、環境保全委員会では、これらの取り組みの中でとりわけ⁽¹⁾の環境憲章の作成を集中的に議論する必要性が出てきたのである。

そこで、環境保全委員会では新たに環境管理等検討部会を設置し、約1年間十分に議論を重ね、ついに成案を得るに至った。

2. 環境憲章の補足説明

環境憲章の内容を理解してもらうには、その制定の背景でもあり、憲章の中にも謳われている環境マネジメントシステムについて若干説明しておく必要がある。

環境マネジメントシステムは、企業等が自らと環境との関わりについて認識し、環境の管理すなわち、環境への配慮行動を経営活動のシステムとして組み込むための手段として規格化されてきたものである。この環境マネジメントシステムには様々なものがあるが、国際的に有名なものは、国際標準化機構(ISO: International Organization for Standardization)が規格化したISO14001である。

ISOは、製品やサービスの国際取引を容易とすることを目的に1947年に発足した民間組織であり、製品等の国際規格を定めているが、最近では品質管理や環境管理という管理についても規格化を図っている。

ISO14001の規格では、対象となる組織が自発的に、環境関連法規の遵守のもと、自ら汚染の防止を含めた環境目的・目標を定め、それを組織的に実現し、さらに継続的な改善を行う仕組み(環境マネジメントシステム)を構築し運営することを求めている。

そして、環境マネジメントシステムを導入すると具体的には1)計画(Plan)2)実施(Do)3)点検(Check)4)見直し(Action)の経営サイクル(PDCAサイクル)に基づいて、継続的改善を行うことになる。

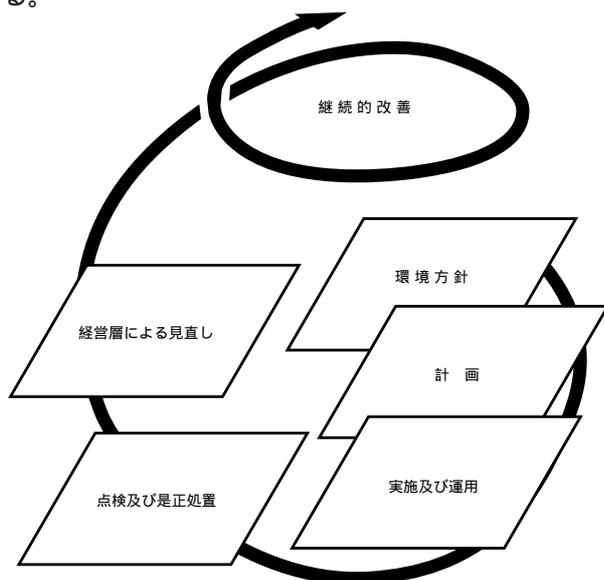


図 環境マネジメントシステムモデル

組織が導入した環境マネジメントシステムがISO14001規格に適合していることを一般に公表する方法として自己宣言等の方法もあるが、一般的には、第三者による認定すなわち「審査登録(認証)制度」によることが多い。

以上の説明から明らかなようにこの京都大学環境

憲章は、この環境マネジメントシステムにおける環境方針に相当するものであり、基本方針に掲げられた各項目も、環境マネジメントシステム導入の柱となるものである。

3. 環境憲章の具体化について

さて、環境憲章に謳われた基本方針を京都大学としてどのように具体化していくかについて、まずは、桂キャンパスへ工学研究科の系別の移転が予定されているので、ISO14001について桂キャンパスの区分毎に認証取得を目指したい。

桂キャンパスに続いて将来的には本学すべてのキャンパスにおいて、認証取得を想定しているが、これにはかなりの期間を要すると思われるので、桂キャンパス以外では各部局単位で、当面省エネルギーやゴミ減量などの環境配慮行動を評価する環境評価プログラムを導入して、環境憲章のフォローアップをする予定である。

いずれにしても、京都大学が真に環境に配慮した大学になるためには、本学の構成員一人一人が、いかに環境保全の大切さを理解し、そのための具体的な行動に取り組むかにかかっているのである。本学の構成員が、この環境憲章にのっとり、種々の環境配慮行動を自主的に取り組まれることに期待したい。

平成14年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成14年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月13日(水)、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	志願倍率	第1段階選抜		第1段階選抜の予告倍率
				合格者数	倍 率	
総合人間学	前期	110人	401人	3.6倍	387人	3.5倍
	文系	55	180	3.3	174	3.2
	理系	55	221	4.0	213	3.9
文学部	後期	20	371	18.6	320	16.0
	前期	190	582	3.1	582	3.1
教育学部	後期	30	417	13.9	303	10.1
	前期	40	156	3.9	150	3.8
法学部	後期	20	171	8.6	148	7.4
	前期	320	835	2.6	832	2.6
経済学部	後期	20	437	21.9	363	18.2
	前期	210	943	4.5	881	4.2
	一般	160	623	3.9	623	3.9
	論文	50	320	6.4	258	5.2
理学部	後期	20	726	36.3	578	28.9
	前期	271	956	3.5	929	3.4
医学部	後期	30	1,208	40.3	1,184	39.5
	前期	90	467	5.2	409	4.5
薬学部	後期	10	230	23.0	152	15.2
	前期	70	276	3.9	276	3.9
工学部	後期	10	195	19.5	195	19.5
	前期	857	2,476	2.9	2,474	2.9
地球工学科	後期	98	952	9.7	787	8.0
	前期	166	458	2.8	457	2.8
建築学科	後期	19	283	14.9	228	12.0
	前期	72	281	3.9	280	3.9
	A選抜	8	84	10.5	65	8.1
	B選抜	4	48	12.0	40	10.0
物理工学科	後期	4	36	9.0	25	6.3
	前期	211	671	3.2	671	3.2
電気電子工学科	後期	24	224	9.3	192	8.0
	前期	117	263	2.2	263	2.2
情報学科	後期	13	95	7.3	78	6.0
	前期	81	231	2.9	231	2.9
工業化学科	後期	9	86	9.6	72	8.0
	前期	210	572	2.7	572	2.7
農学部	後期	25	180	7.2	152	6.1
	前期	233	753	3.2	752	3.2
資源生物科学科	後期	67	954	14.2	926	13.8
	後期	19	197	10.4	197	10.4
	後期	9	148	16.4	148	16.4
	後期	11	161	14.6	161	14.6
	後期	9	182	20.2	182	20.2
	後期	12	189	15.8	189	15.8
	後期	7	77	11.0	49	7.0
合 計	後期	2,716	13,506	5.0	12,628	4.6
	前期	2,391	7,845	3.3	7,672	3.2
	後期	325	5,661	17.4	4,956	15.2

(注1) 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

備考 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部(後期)20名、経済学部(後期)20名の募集人員に加える。

[外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)]

学 部 名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法 学 部	20人以内	37人(1.9倍)	18人(0.9倍)
経 済 学 部	10人以内	23人(2.3倍)	10人(1.0倍)

博士学位授与式

1月23日(水)午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長等関係者出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成13年11月26日付、同14年1月23日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時40分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	平成13年11月			平成14年1月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文学研究科	1	3	4	3	3	6
教育学研究科		1	1		2	2
法学研究科		2	2	1		1
経済学研究科	1	1	2	1	2	3
理学研究科	10		10	5		5
医学研究科	3	8	11	9	4	13
薬学研究科		1	1		4	4
工学研究科	9	11	20	2	16	18
農学研究科	4	11	15	2	14	16
人間・環境学研究科	3	2	5			
エネルギー科学研究科					4	4
情報学研究科	2	3	5	1		1
計	33	43	76	24	49	73

「京都大学と近畿地区在日外国公館等との交流会

(Kyoto University Kansai Forum)」の報告

京都大学は、昨年7月に在京外国公館等を対象に本学の研究を紹介する「京都大学・東京フォーラム」を開催したところであるが、それに続くものとして、2月6日(水)に総合博物館において、「京都大学と近畿地区在日外国公館等との交流会(Kyoto University Kansai Forum)」を開催した。

この交流会は、地域社会との連携を強めるとともに、世界に開かれた大学として国際交流を深め、地域社会との調和ある共存に貢献することを謳う「京都大学の基本理念」のもと、国際的・地域的に支援・協力を得ている近畿地区の在日外国公館及び文化交流団体等の方々を招き開催された。今回は特に、昨年リニューアルした総合博物館を会場とし、本学の伝統的分野の一つである「フィールドワーク」にスポットをあてて、研究活動を紹介する講演会及び博物館視察が行われた。

同交流会は、午後2時から始まり、長尾 真総長の「21世紀に挑戦する京都大学」と題した講演において、京都大学の現在と将来像を地域的・国際的視点から紹介し、その後瀬戸口烈司総合博物館長により、本学が誇る研究スタイルである「フィールドワーク」の伝統と現状について講演を行った。さらに、松沢哲郎霊長類研究所教授により、チンパンジーの



松沢教授による講演

知性及び生態の研究について講演が行われ、続いて総合博物館において常設展示及び特別展示『今西錦司の世界』展の視察が行われ、好評を博した。

当日は、ヨゲーシュワル・ヴァルマ在大阪インド総領事、チャッカリン・チャヤボン在大阪タイ王国総領事をはじめ各国の在近畿地区総領事館や国際文化交流機関などの関係者、及び木村光祐京都工芸繊維大学長など学術機関と本学の関係者を含む64名の出席があった。

また、午後5時30分からは京都市内のホテルに会場を移しレセプションが行われ、発表者を中心に歓談の輪が広がり、盛況のうちに終了した。

国立大学の改革に関する講演会の開催

2月8日(金)午後3時から、工学部8号館3階大会議室において、徳永 保文部科学省大臣官房総括会計官を講師に迎え、「国立大学の改革に関する講演会」が開催された。この講演会は、大学改革の現状と課題について理解を深めるために行われたもので、200名をこえる教職員が出席した。徳永総括会計官は大学改革の基本的方向、大学の設置形態・運営の在り方、及び国立大学法人化後の財務会計制度の在り方を中心に、地方公共団体との連携や、アメリカにおける大学の管理運営の実例など、具体例をあげながらわかりやすく講演を行った。出席者はおよそ2時間にわたる講演を熱心に聴講し、現在の



国立大学のおかれている厳しい状況について理解を深めるとともに、今後の大学改革の必要性と課題について認識を新たにしていた。

紹介

総合人間学部構内における平安時代経塚の発見

京都大学の構内には、吉田キャンパスのほぼ全域をはじめ、高槻市の農学部附属安満農場、和歌山県白浜町の理学部瀬戸臨海実験所などに重要な遺跡の存在が知られている。埋蔵文化財研究センターは、こうした遺跡の調査研究、成果報告と保存活用をおもな目的として活動している。ここでは、最近、総合人間学部構内の発掘調査でみつかった平安時代の経塚について紹介したい。

調査は、全学共通教育棟の新営工事にともない、A号館の北西約2,300㎡の範囲で、2001年10月から実施してきた。節分を迎える頃、古代の層の掘り下げをはじめたところ、市街地の遺跡調査ではまず出土することのない経塚遺構の存在が明らかとなった。しかも、そこに納められていたのは、近畿地方では発見例の無い九州型の青銅製経筒であった。こうした資料の希少性から、出土した状態そのままをひろく一般に公開することとし、2002年2月8日に現地説明会を実施した。平日にもかかわらず多くの方々が参加された(表紙写真)。

経塚とは、経典を後世に残すべく地中に埋納した遺跡である。藤原道長が1007(寛弘4)年に造立し



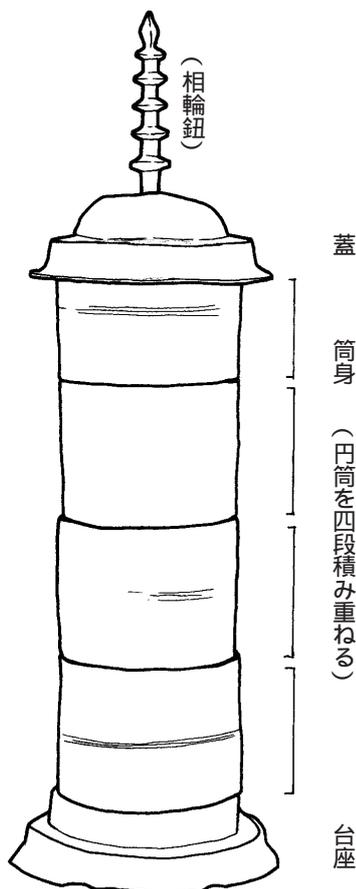
経塚の出土状況(南から)
手前側で2個の立石に囲まれて出土しているのが青銅製の経筒。台座の上に円筒を積み重ねていた状態が、下から二段分残されている。その左上はずり落ちた蓋で、径12cm。背後にも小さく方形に囲む石組みがある。

た吉野の^{きんぶせん}金峯山経塚が最古の例とされ、末法思想が広がった平安時代後期以降に流行した。写経の巻物を青銅製や陶製の円筒形容器(経筒)に納め、さらにそれを陶製の容器(外容器)で覆い、地中の小石室などに埋め、上部にも積み石や盛土をするのが標

準的なやり方である。山岳地帯や寺社境内など、霊場や聖地と言われるような場所に築かれることが多いため、古墳などと違い一般の人々に馴染みのある種類の遺跡とはなっていないけれども、列島各地に数多く存在が知られ、研究史も長い。近くでは比叡山や鞍馬山、花背峠などが有名である。こうした立地の特異性から、発掘調査でみつきり精密に検証される機会は多くなく、その点で、今回は非常に価値ある発見といえる。

さらに重要なのは、出土したのが九州型経筒という点である。経塚に関しては、とくに近畿地方と九州地方は、異なる二大中心地とも言われ、それぞれ特徴的な型式の経筒を用い、造営の作法も若干異なっている。九州型の経筒は、その名が示すように、ほぼ九州に限って分布し、ほかには山口と岡山で各一例報告されているのみである。それが京都で、しかも京都大学構内というおよそ経塚の立地としては想定外の場所で、出土したのである。

この経筒は、九州型のなかでも主流となる「積上



参考：
青銅製4段積上式経筒（総高38cm）模式図
福岡県英彦山南岳経塚出土品より作成

式経筒」と呼ばれるもので、台座上に径9cm高さ6cm前後の円筒を積み重ねていく構造をもつ。積上式には、四段の例がもっとも多く、規格性も高い。また、1136～52年に相当する年号を記すものが知られている。今回の例は、台座上に位置をとどめる円筒は二段分しかなかったが、破片は多数出土しており、蓋や台座の形状からみても、四段の積上式であったと思われる。

外容器は出土していないので、石室状の施設に直接経筒を納めていたと想定される。しかし石室は、西側を大学の排水管路に破壊され、経筒下の平板な台石と、東側を囲む2個の石が残るのみである。管路の掘削があと5cm東へずれていたら、おそらく台石ごと全体が失われていたであろう。なお、経筒以外には、大量のガラス小玉が台座下より出土しており、ほかにも飾金具数点、経巻の断片らしき紙片がある。さらに、北東側にも小さな方形の石組が存在し、関連する施設の可能性が高いけれども、出土品はなく性格不明である。

出土地は、桜や松の木々のなかに折田先生の銅像や掲示板などがあり、賑やかだった場所にあたる。「ああ、あのあたりか」と思いあたる人もいよう。ここが平安後期にどのような空間であったのかは、諸説あるものの定見はない。またなぜ九州型の経筒が埋納されたのかについては、全くの謎というほかない。依頼を受け経塚祭祀の実際を執り行ったとされる修験僧達の広い行動圏の賜物か、はたまた九州に縁ある一貴族の嗜好の産物か、推理の興味は尽きないけれども、今後発掘成果と関連資料をじっくり見直さなければならない。そして、卵殻のように薄い経筒の青銅破片を繋げて修復し、分析と検討を進めていくためには、自然科学分野の専門家の協力も得ながらの長期にわたる取り組みが必要となろう。入学した誰しもが行き交う道すがらの、わずか1mにも満たない地下に、奇跡的に破壊を逃れて900年近く眠り続けてきた経塚である。しっかりと安住の地を与えられるようにと願いながら、研究を進めている。

（埋蔵文化財研究センター）

随想

タイトル? 「停年でやめた人の近況報告」とでもしておいて。

名誉教授 久保田 競

21世紀になって、世の中は不安定な時代になった。不景気、テロ事件、狂牛病などなど。誰もが違った生き方をしなければならなくなった。私は、先は永くないから、今までの生き方に固執している。



古くから友人にあうと、聞かれる。「おお、元気か?」、「まあ、まあ」と答える。「まだ、走ってるのか?」と聞かれる、「それがネ、なかなか時間がなくて」と答える。「研究は、今でもやってるのか?」との問いには、「勿論」と元気に答える。「もう、老化して無理だろう?」「無理だけど、やってるんだ」と。

もうすぐ、70歳。あたまの老化は、相当なもの。生活の上では、毎日失敗がある。頭部 MRI 画像をみると、確実に老化の徴候がある。

中学2年生の時、先生に「将来何になるか」ときかれ、「科学者」と答えた。医学部学生の間から生理学教室に出入りし、イヌで条件反射の実験をした。大学院へ行って、神経生理学者となり、幸い、神経生理学の研究のできる職を得て、原著論文を100篇ほど書いたところで、京大退官となった。研究がいよいよ面白く、退官直前のころから、研究はいつまでも続けようと決心した。これが、私の頭の老化対策である。

1996年に日本福祉大学に移ったが、研究できるように設備をしてくれれば、と云う条件をつけた。ところが、研究を助ける設備、機器、スタッフは0、空間と研究費が年40万円あるだけ。研究のための京大が天国なら、福祉大は地獄。研究成果が出せたら、奇跡に近い。

年々、外部の研究費を取るのも難しくなり、来年度は0になる。毎年、人がうらやむほど、科学研究費を使ってたのに。科学研究費のなかった年は、私が東京大学講師になって2年目の昭和40年だけだった。今の日本には老人研究者に対する厚遇策は何もない。15年程前から、研究費を配る立場になってたが、定年教授から研究費が取れないので何とかして

くれないかとよく言われた。大抵はその研究は意味がないとけとばして来た。今にして思うことは、もっと親切にしておけばよかった。因果応報とあきらめているが。

日本福祉大学では、私の京大での経験が役立つようで、委員、なんとか長など、たくさんやらされている。会議に時間が取られるのが、一番困る。家内によると、私の働きぶりは、「月、月、火、水、木、金、金」で、朝暗い内に家を出て、夜おそく帰ってくる。会話をする時間が無いので、携帯電話を使っている。それに、走ってる時間がへった。

頭が働かない、研究費がない。時間が無いと3「ない」拍子が揃っていても、なんとかなるもの。

サルの実験は、餌代、世話が大変なので、止めて、人間を使うことにした。安上がりだ。幸いにも、こんな私と、仕事をしたいという奇妙な学生が現れた。約1年データを集めて、昨年11月 San Diego で開かれたアメリカの神経科学会で発表した、「習慣的にジョギングをすると前頭前野のテストの成績がよくなる」。走ると前頭連合野の働きがよくなることを世界で初めて示した。

学会直前に、学会から学生の所へ、「運動と認知」の新聞記者会見を準備しているので、「何を見つけたか、何が新しく、興味深いか、基礎と臨床の神経科学でどれくらい重要か。誰に何をどのようにして、何を見つけたか、次の計画は、など」親に解るように書いて欲しいと。書いたら、新聞記者会見をすることになった(会見になる発表は、演題12,000のうち100題ぐらい、学会出席者は3万人)、いくつかの新聞で記事になり、ロイター通信が外電を流した。それが日本の新聞にも記事が出た。実は、使ったテストはサルの前頭前野の最先端部の働きをしらべるために考えたもので、サルの結果も同学会で発表しているが、こちらは、大して反響はない。週に2~3回、1回に30分、少し汗が出るぐらいのスピードでジョギングをする。コンピューターディスプレイに出て来た点の場所を10秒おぼえている。おぼえている時に別のテストである刺激に反応し、別の刺激に反応しない反応選択をする。ある課題を主に

やっける途中で、別の課題を従にする。前頭葉の最先端の働きである。短期記憶と行動の決断の能力を調べてる。この成績が走る前が65点だったのに、3ヵ月のジョギングで95点にあがった。止めるとさがるし、ジョギングをしないとあがらない。

20年ほど前に「ランニングと脳」という本を書いて、走る時前頭連合野は働いてないので、考えながら走ると良いと、走ることをすすめた。今度は、働くので、走りなさいと勧めなければならず、本は全

面改定しなければならない、仕事が増える。

私の学生の感想は、「研究って、おもしろい！一生やりたくなかった！」。私の老化を遅らせるのに貢献してくれている。

今は、助けてくれる人が居なくなったらどうするかを、考えているところ。

(くぼた きそう 元霊長類研究所教授

平成8年退官、専門は神経科学)

洛書

きみ、文学部へ何しに行くんや、小説家にでもなるつもりか？ 理系の先生方のための文学部案内

齊藤 泰弘

ごく一般的に言ってだが、理系の人にとって文学部のイメージは、恐ろしく硬直しており、正直言って偏見だらけのようである。『京大広報』12月号の洛書欄でも、同僚の内井先生が、昔、工学部から文学部に転進する際に、指導教官から上記テーマに掲げたような、どぎつい言葉を浴びせられた逸話を紹介していた。私はこの下りを読んで大笑いしたものだが、実はつい最近、私にも似たような事件が起こって、とても笑う所ではなくなってしまった。先日私は、ある理系の先生の投稿記事について、文章が大変見事だと電話で述べたところ、その先生から「文学部の先生に文章を誉めてもらうとは光栄ですなあ」と言われ、私の方は啞然として言葉が出なかった。やはりどうやら理系のかなりの人は、文学部は小説家を養成する所だと、まだ固く信じ込んでいる節がある。

そこで、わが文学部の名誉のために、ここはそのような所でないことを説明しようとして筆を取ったのだが、「じゃあ文学部って何をやる所？理系と比べて、どこがどう違うの？」と迫られると、なかなか上手に答えられない。実は答えようとすればするほど、どうもこちらの旗色が悪くなるので癪に障



るのだ。その一つの原因は、われわれの研究が一般性や共通性よりも、固有性や特殊性を相手にすることが多い点にあるようだ。

舌足らずなので具体的に説明しよう。たとえば私の専攻はイタリア語学・文学である。イタリアという国は、人口が日本の半分、国土面積は日本の4分の3の小さな国、そして私の主たる研究と関心は、この国を舞台にした人間と歴史と文化である。ただしその下に、古代ローマ以来の膨大な文化伝統の地層が横たわっていることは言うまでもない。私の関心がこの特殊な地域の枠外に出ることは先ずない。それに対して一般に理系の人々が対象とするのは、人間的尺度から懸け離れた広大なミクロやマクロの世界であり、それ故、それは西洋人にも東洋人にも分け隔てなく平等に開かれた世界で、そこで話される言語も、あらゆる国の研究者と平等にコミュニケーションできる世界共通語＝英語である。つまり、彼らは、文学部の扱う個々の言語や個々の文化という特殊性＝障害をあっさり飛び越えて、オリンピックのように完全に平等なルールの下、全世界で互いに競争してノーベル賞の取り合いをしている。とすれば、地方のドサ回りの選手が、世界を股にかけて学会を飛び回る国際アスリートにかなう訳がないではないか。

「でも理系の人って、本当に国際人なの？」実際に自分の体験したことを話そう。かつて京大とイタリアのシエナ大学の間で、交互に1年おきにシンポジウムが開かれていた。部門は人文学、経済学、工学の3つ、使用言語はわれわれの人文学がイタリア語、後の2つは英語。われわれの部会では、相手の得意な言葉を用い、相手の得意な文化について研究発表し討論するのだから、われわれは日本人というハンディキャップを何とか克服しなければと必死で、常に疲労困憊だった。ところが、工学セッションの人々は、両者にとって機会均等で互いにハンディキャップのないミクロの世界について、共通語の英語で討議していた。その部会を覗き見した私は、日伊の研究者たちの極めて平和で平等で、ナショナリズムの介入しない人間関係に深く感じ入り、心から羨ましく思ったものである。

だが、問題はシンポジウムが終わってからだった。ほっとした日本人参加者たちは、人里離れた大学のゲストハウス（かつての修道院）から飛び出して、花の都フィレンツェに遊びに行くことになった。私も理系の先生と連れ立って気晴らしに出かけた。その時奇妙なことが起こる。私は開放感から店の売り子をからかったりして、心いくまでイタリアを楽しませてもらったが、同行した先生は、突然、外国慣れしない日本人観光客になってしまい、私をまるで添乗員のように頼りにし始める。私がいろいろ案内して上げると、自分はフィレンツェは何度目かの訪問だが、今回初めているんなものを見せてもらったと感謝される。その翌日も一緒に行かないかと誘われた。私は個人的な用事があるので...と答えると、その人は、はっとしたように自分も一人で行ってきますと言って立ち去った。

この時、私はその人の勇気を大変立派だと思う反面、ある恐ろしい疑念に捉えられた。世界中の人と交流する国際人というのは、本当は幻想ではないの

か？ 英語圏以外の外人同士が、自分の文化や生活から縁遠い研究テーマについて、互いに母国語でない共通語で議論したとすれば、確かに文化障壁を感じずに平等感を味わえるだろう。だがそれは、実生活と切り離された人工的な世界での抽象的な平等であって、一步フィレンツェの街角に立てば一挙に吹っ飛んでしまう儂い代物ではないか？ しかも、このような国際人幻想を持つ人の内部には、案外と古い日本人的心性が、手付かずのまま保存されているのではないか？

それと比べると、文学部の研究は地道であり分野も特殊だ。他国民の言語や文化を真に深く理解するには、年月と苦労が必要だ。しかし、弛まぬ努力によって、自分の片足を日本に据え、もう一方の足で相手の国を踏みしめて、両者を跨いで立つような視点を獲得した時、われわれは相手の文化だけでなく、自分自身の文化までも相対化して眺められるようになる。それゆえ、お互いの文化的特殊性は確かに両者を隔てる障壁であるが、それを避けて通ってはならない。この障害をこつこつと地道に乗り越える努力をして初めて、真の相互理解が達成されるのであり、真に相手を理解することは、逆に自分自身も変わることを意味するのだ。実は文学部のわれわれも国際人となることを目指している。しかし、われわれの言う国際人とは、抽象的でひ弱な人種のことではなく、もっと具体的で実質を備えた国際人であり、より正確に言えば、他国の文化を深く知りそれを深く愛する日本人研究者のことである。

以上のような前置きをして、さていよいよ文学部案内を始めようと思ったら、もうすでにかかなりの枚数オーバーで、これ以上は絶対に駄目だとのお達し。仕方がありません。この続きはもっと説明の上手な文字部の他の同僚にしてもらおうことにします。

（さいとう やすひろ 文学研究科教授）

訃報

このたび、^{とみおか じろう}富岡次郎名誉教授、^{いわい のぶゆき}岩井信之名誉教授、^{いぬふしやす お}犬伏康夫名誉教授、^{おごしかずそう}御輿員三名誉教授、^{たけうち}竹内あけみ医学部附属病院文部科学技官が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

富岡 次郎 名誉教授



富岡次郎先生は、1月8日逝去された。享年74。

先生は、昭和27年京都大学文学部史学科を卒業し、引き続き同大学院で西洋史を学ばれた。

この間、奈良女子大学文学部助手を務められ、大学院修了後は京都大学人文科学研究所助手、同教養部助教授を経て、同45年教養部教授に就任、西洋史学を担任された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成3年から同10年まで京都学園大学教授を務められた。

先生はイギリス近代史の分野で研究を始められ、

とくに農民一揆の研究ではわが国における開拓者として活躍された。その後、研究対象を徐々に新しい時代へと移され、労働運動、社会主義運動の領域でも膨大な史料を駆使して優れた業績をあげられた。その後、先生の関心は、当時の日本のイギリス研究においては等閑視されていた移民問題に移り、ここでもパイオニアとして、イギリスにおける移民労働者の実態を解明する顕著な業績をあげられた。この問題については退官後も研究に没頭され、2冊の大作を刊行された。

主な著作に、『イギリス農民一揆の研究』、『日本医療労働運動史』、『現代イギリスの移民労働者』、『移民労働者の教育問題』などがある。

(総合人間学部)

岩井 信之 名誉教授

岩井信之先生は、1月20日逝去された。享年75。

先生は昭和29年京都大学医学部医学科を卒業後、本学保健診療所助手、医学部講師を経て同52年4月同教養部教授に就任、保健学・生活科学、自然科学の講義、実習を担当された。先生は、多くの学部で幅広い経験を生かした総合的教育をはじめ学生の指導、研究者の育成に顕著な成果を収められた。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和59年4月から退官されるまで体育指導センター所長を併任され、本学の管

理運営に貢献された。

先生のご専門は内科学とくに循環器学、神経学であり、教授就任後は臨床保健学の分野においても数多くの優れた研究業績を残された。研究は脳血管障害の病態解明、診断法の開発から始まり予防医学的研究へと発展させ、これらの成果を応用して本邦における脳卒中発病の激減に貢献された。さらに、日本循環器学会、神経学会、脳卒中学会、心身医学会、全国大学保健管理協会の評議員として広い分野で学会等の運営に寄与された。(総合人間学部)

犬伏 康夫 名誉教授



犬伏康夫先生は、1月25日逝去された。享年81。

先生は、昭和18年京都帝国大学医学部薬学科を卒業、同21年本学医学部助手、同助教授を経て、同35年大阪大学薬学部教授に転任し、同42年京都大学薬学部教授に就任、有機薬化学講座を担当された。昭和58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、武庫川女子大学薬学部教授に就任された。

先生は、昭和37年より同42年まで大阪大学附属図書館薬学分館長、昭和49年より同51年まで京都大学薬学部長を務め、大学・学部の発展に尽力されるとともに、同51年より2年間日本薬学会副会頭として、

学会の運営にも貢献された。また、文部省学術審議会専門委員、文部省薬学視学委員として、長年にわたり文部行政にも貢献された。

先生のご専門は、天然物化学及び有機合成化学で、特に動植物成分研究の分野で、多数の新規骨格天然物を発見し、その構造解明を先駆的に行い、本研究分野の発展に先導的役割を果たされた。さらに、一連の代表的な植物塩基成分やコリアミルチン、デントロピン、矢毒蛙成分などの全合成を独創的な設計に基づき達成し、国際的に高い評価を受けた。なかでも、「本邦産リコポジウム属植物成分の決定」に代表される業績により昭和43年度日本薬学会学術賞を受賞され、また平成5年4月には勲2等旭日重光章を受けられた。主な著書に『有機薬化学』がある。
(大学院薬学研究科)

御輿 員三 名誉教授



御輿員三先生は、1月30日逝去された。享年85。

先生は、昭和14年京都帝国大学文学部文学科を卒業後、文学部副手、広島高等師範学校講師、広島高等学校教授、広島大学助教授、京都大学助教授(文学部)を経て昭和37年同教授に就任し、英語学英文学第二講座を担当された。昭和55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、評議員、文学部長を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、大谷女子大学大学院文学研究科教授を務められた。

先生は、永年にわたって英文学、とりわけ英詩の

研究に専念し、多くの優れた研究業績を残された。その研究の特色は英詩のことばに対する鋭い感覚に裏打ちされた精細緻密なテキスト読解にある。この学風を示す代表的な著書としては、『ことばと詩 英詩考その1』と『神と悪魔との間で 「楽園喪失」論 英詩考その2』があり、両書とも学界において高く評価され、今日においても名著として知られている。また、自ら『季刊英文学』を12年間にわたって主宰し、数多くの優れた研究者を世に送り出し、日本の英文学界の発展のために尽力された。

先生はまた、日本英文学会、京大英文学会、日本ホブキンズ協会関西部会などの学会においても活躍され、特に京大英文学会では会長を務められた。

(大学院文学研究科)

竹内あけみ 医学部附属病院文部科学技官

竹内あけみ氏は、2月7日逝去された。享年52。
同氏は昭和54年4月から医学部附属病院看護部に

勤務され、以来22年余りの永きにわたって看護業務に尽力された。
(医学部附属病院)

日誌 2001. 1. 1 ~ 1. 31

- | | | | |
|------|-----------------------|-----|-------------------|
| 1月4日 | 新年名刺交換会 | 19日 | 大学入試センター試験(20日まで) |
| 15日 | 評議会 | 21日 | 学生部委員会 |
| " | 大学院審議会 | " | 総長, 職員組合との交渉 |
| " | 保健衛生委員会 | 22日 | 環境保全委員会 |
| " | 京都大学教育研究振興財団助成事業検討委員会 | 23日 | 博士学位授与式 |
| 16日 | 国際交流委員会 | 25日 | 同和・人権問題委員会 |
| 18日 | 寄附講座等審査委員会 | 29日 | 評議会 |

話題

スタンフォード大学とインターネットを利用した日米共同演習科目の実施

情報学研究科社会情報学専攻は、平成13年度後期に、スタンフォード大学コミュニケーション学科と共同で演習科目を実施した。演習科目の内容は、インターネットを用いた新しい通信手段が、人間の心理に及ぼす影響を実験によって確かめるといったものである。京都大学側(石田 亨教授)から仮想空間の技術を、スタンフォード大学側(クリフォード・ナス教授)から社会心理学実験のノウハウを持ち寄って演習科目を構成した。この実験は、科学技術振興事業団デジタルシティプロジェクトと通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センターの協力を得て実施された。

演習では、京都大学とスタンフォード大学の学生が数名ずつチームを組み、社会心理学実験テーマの設定から実験システムの構築、実験の運営まで全て共同で行った。両大学の学生は電子メールやチャット、3次元ビデオ会議システム FreeWalk を駆使して連絡を取りながら、時差を乗り越えて共同作業を行った。「バーチャルオフィスにおける作業スタイルの日米間の相違」や、「コンピュータキャラクタ



3次元ビデオ会議システム FreeWalk を用いた日米学生グループの打ち合わせの様子

の国籍が利用者に与える印象の日米間の相違」など、異文化コミュニケーションに関わる実験テーマが学生達によって設定され、日米を3次元ビデオ会議システムで繋いで実験を進められた。

インターネットを利用した講義の配信は様々に試みられているが、単位を学生に与える演習科目を共同で実施した例はなく、わが国は初めての試みとして注目される。
(大学院情報学研究科)

京大病院で『新春コンサート』を開催

京大病院では、1月22日（火）夕方、外来棟1階のアトリウムホールに特設ステージを設け『新春コンサート』を開催した。

コンサートは田中紘一病院長の挨拶に始まり、院内学級の子供たちによる歌と演奏、岡部とうこうボサユニットによるギター演奏、歯肉がんで一時は声を失いながら、懸命なりハビリで回復した堤 歌代子さんによる歌と闘病体験談など多彩な出演者、盛り沢山のプログラムで実施した。

当日は、来聴の患者さんも加わって合唱するなど、吹き抜けのアトリウムホール2階の立ち見も含め、入院患者さん、当日来院の外来患者さん約200人から盛んな拍手が送られていた。

このコンサートは、入院患者さんへ“憩いのひととき”を提供するため、平成7年から毎年、事務部・看護部による実行委員会が企画している手作りのイベントで、医学部附属病院の恒例行事となっている。（医学部附属病院）



院内学級の子供たちによる歌と演奏



堤 歌代子さん

お知らせ

「京都大学教官の著作を読もう！ 100選」の開催

総合人間学部図書館では、読書案内に取り組んでいる。当図書館の性格から対象は、主として1・2回生になるが、読書案内の目的は、学生に読書の楽しみを知ってもらうことと共に、利用者とのコミュニケーションの場を設け、図書館に対する要望・要求を把握し、今後の運営に生かすことにある。

第1回目の企画は、「コンテンポラリー作品を読もう！ 現代著述家100人」で、昨年11月26日（月）から12月22日（土）まで開催した。現代活躍中の著述家100人の著作1点ずつ、総合人間学部図書館1階カウンター前に展示し、貸出した。常に8割強の貸出で回転もよく、予約も沢山あった。パンフレットやホームページ、アンケートも用意した。

第2回目の企画は、新入生歓迎「京都大学教官の著作を読もう！ 100選」で、4月開催に向けて準備している。今回の目的は、京都大学に入学し希望に胸を膨らませている時に、目標設定や進路決定の参考になるような著作を紹介し、学生生活を充実させるために役立て、これから接する教官や図書館をより身近な存在として受け止めてもらうことにある。現在、出版情報等を収集中で、既に何冊か著作の提供がある。

この企画に併せて、下記の要領で「新入生歓迎講演会（トーク形式）」を予定している。新入生に限らず、多数参加いただきたい。

記

日 時：4月8日（月）午後4時30分～6時30分の予定
 場 所：吉田生協2階
 講 師：国際日本文化研究センター助教授 井上章一（本学工学部 昭和53年卒）
 推理作家 綾辻行人（本学教育学部 昭和59年卒）
 対談テーマ：「あなたが大学生だったころ」



URL: <http://www.stdlib.h.kyoto-u.ac.jp/contemp/>



（総合人間学部）

編集後記

編集委員会での作業は、大部分が字句の修正などの淡々としたものであるが、ときには真剣な議論が沸く。「刺激的で面白い、掲載しよう」、「いや、本誌の性格を考えると反対だ」とか、「面白いけれど何か裏がありそうだ」、「いやそう難しくとらえなくても」などと。こうなればしめたもの、本来の仕事に早く戻りたいという気持ちは消え去り、脳味噌の仕事ぼけしている部分に「電気が走った」ような新鮮さを感じる。もちろんそればかりでは時間がかかって困るけれど、ときにはそんな原稿を戴きたい。

（高野記）